現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人

第8回

監修／蘇士澍 中国書法家協会主席
取材・文／郭同慶

張海

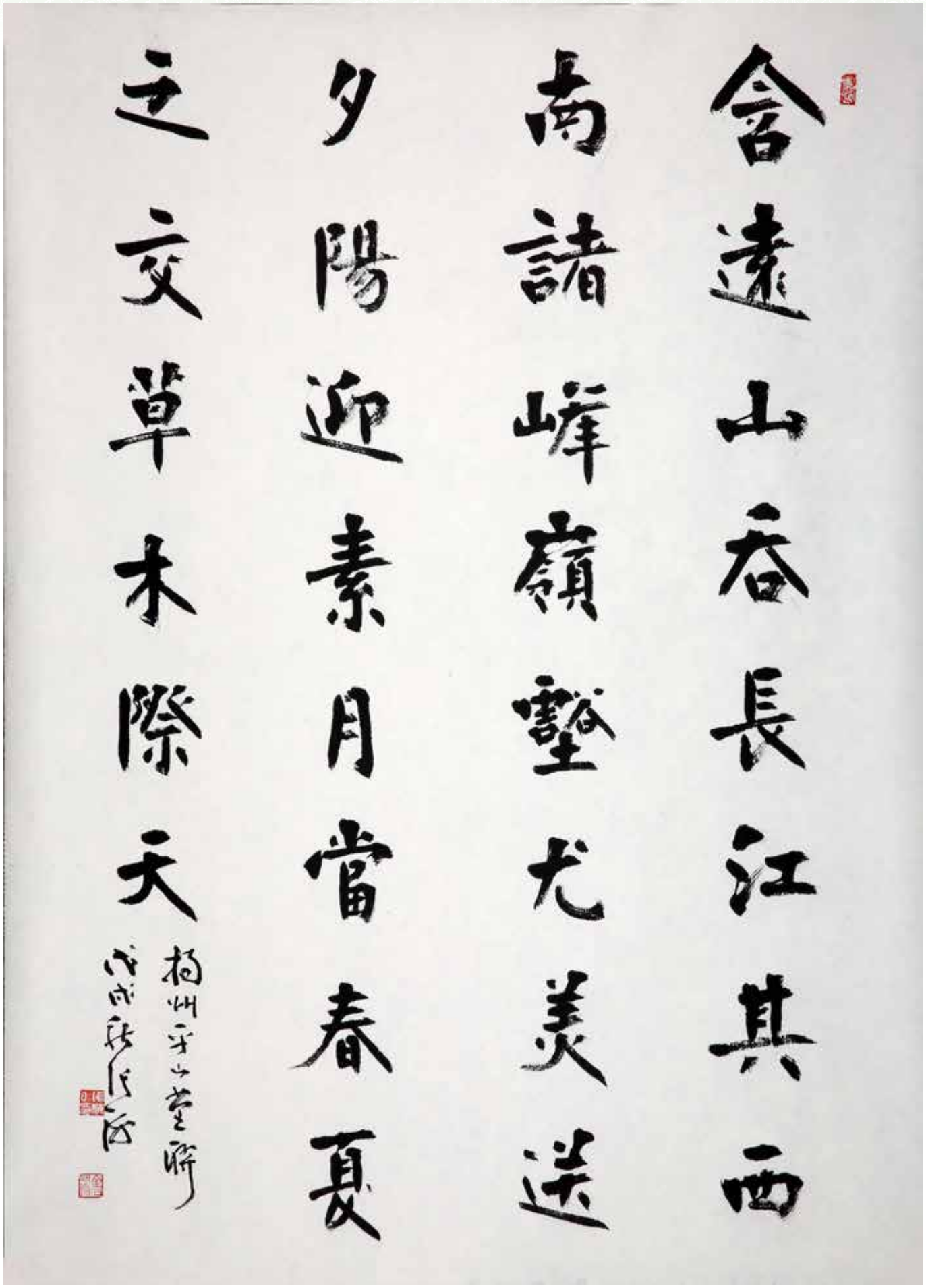
ちょう・かい

河南省文学芸術界連合会主席、河南省書法家協会主席、河南省書画院院長、鄭州大学美術学院院長、第八回・第九回・第十回全国人民代表大会代表、第十一回・第十二回全国政治協商会議常務委員、第五代・第六代中国書法家協会主席などを歴任。現在、中国書法家協会名誉主席、鄭州大学書法学院院長・博士課程教授、全国政治協商会議書画室副室長

一九四一年、三蔵法師・玄奘と同郷の河南省に生まれた張海氏は、中国書法家協会の設立以来、二期連続で主席を務めた唯一の存在。長年、書法振興や新人育成に尽力し、また前例のない事業を推進してきた。その実績は至上なる評価を得て、中国国内において「終身成就書法家」の最高賞を受賞。郭同慶氏による渾身の取材は、長時間に及んだ。（編集部）

中国当代8.indd 114 2019/04/14 18:54

《揚州平山堂聯句》



含遠山　吞長江　其西南諸峰嶺壑尤　美送夕陽　迎素月當　春夏之交草木際天

120×86　2009年

中国当代8.indd 115　2019/04/14 18:54

中国書法復興の立役者　張海

影響力が最も大きい大家

中国書法家協会（中国書協）が一九八一年五月に設立されて以来、唯一、二期連続して主席を務めたのが今回の主人公・張海氏である。現在、中国書協の名誉主席を務める張海氏は、沈鵬氏（連載第二回で紹介）の後任として二〇〇五年に第五代、そして二〇一〇年に第六代の中国書協主席として、二〇一五年までに十年も務めた影響力が最も大きい大家である。二〇一六年三月に国家博物館で開催された張海氏の個展には、彭麗媛氏（習近平夫人）を始め、呉邦国氏（元全人代常務委員会委員長）、賈慶林氏（元全国政治協商会議主席）、李長春氏（党中央政治局常務委員）などの党中央、政府の要人が大勢、開幕式典に出席し、観覧で来場した。そのことは、張海氏の芸術成果や主席としての実績に対する至上なる総合評価である。

昨年四月十八日、蘇士澍主席の誘いにより浙江省紹興市書法の聖地・蘭亭で行われた「第六回中国書法蘭亭賞」式典に参列した。その式典で張海氏は高式熊氏（連載第一回で紹介）とともに中国文連（中国文学芸術界連合会）、並びに中国書協より「終身成就書法家」の最高賞を受賞した。その日、取材の申し出に対して張海氏は気持ちよく承諾し、秘書の張建才氏と日程を調整するようにと言われた。今年の正月明けに早々、北京市内西三番目の環状線沿いにある中国当代書法篆刻院で昼食を挟んで約五時間半も、前例のない長時間の取材を経験した。正直にいって今回は今までない感動や感激を受け、心の底まで撃たれたような衝撃があった。

経済の急成長を成し遂げた中国の昨今は、書家も例外がなく自己本位で行動を定める方が一般的である。しかし、張海氏が長年に亘り書法振興や新人育成を最優先にし、幾つも前例のない事業を推進し、かつ相当の私財を注いだ話に涙が零れるほど敬服した。

《四言句》

39×150　2019年

二つ古都に縁深い

張海氏には、縁の深い二つの古都がある。

一つ目の古都は、「偃師（えんし）」である。

偃師とは『西遊記』で有名な三蔵法師の故郷であり、河南は史上では東の都であった洛陽を有する最も悠久な歴史を持つ省である。

張海氏は三蔵法師・玄奘と同郷で河南省に生まれ、同市は紀元前一〇四六年、周武王が夏王朝の最後の王である紂を討つ東征を成功に納め、師（兵隊）を偃（休む）した名所であることから「偃師」という地名になった経緯があり、また、夏、商、周、東漢、魏（曹操）、西晋、および北魏という七つの王朝の都でもあった。書道史に名を残す顔真卿、王鐸、また詩聖・杜甫などの墓がある。少年時代に市内の名所旧跡を回り、目に焼き付けてきた濃厚なその歴史文化が張海氏の人生に大きな影響を及ぼしたと断言しても言いすぎにはならないだろう。

張海氏は偃師の農村部の家庭に一九四一年に生まれ、幼い頃は小学校教員の伯父に習字を習った。小学校四年の時に担任の郭樹泰先生が黒板に書写する字に魅了され、習字に励んだ。そして腕前を見せるチャンスがあった。当初は県だった偃師県より劉秋鳳という青年が招待され、学校で行う講演会の横断幕を書くはずだった郭樹泰先生が急病で倒れ、やむを得ずに張海少年が校長に代役を指名されたのだ。力強い顔真卿風の楷書が大変好評だった。それが励みとなり、張海少年は習字の稽古に一層精進しながら、学校の壁新聞やポスターなどにおいても積極的に書の腕をふるった。一九六〇年、高校卒業後に新郷市立師範専業大学に進み、師範大学でも書道倶楽部で《乙瑛碑》《史晨碑》などの漢隷を中心に臨書を繰り返した。一九六二年、十四名の同期と一緒に省内の安陽市教育委員会に配属された。

二つ目の古都は、「安陽」である。

安陽は一八九九年、殷の跡地で大量の甲骨文が発見されたことで、世界に「甲骨文の故郷」として知られ、また、中国の七つの古都（西安、洛陽、北京、開封、南京、安陽、杭州）の一つに数えられている。殷、北魏、後趙、冉魏、前燕、東魏、そして北斉の七つの王朝がここに都を置いた。どこを掘っても文物の欠片が出てくると言われるほど、歴史文化の香りが満溢する街である。

新人教員の短期研修を受け、人事課担当より配属地についてヒアリングがあった。高校に七名、中学校に七名、小学校に一名の配属予定に対して、なかなか小学校へ行く希望者が出て来ないという状況を聞いた張

中国当代8.indd　116　　2019/04/14　18:54

翰墨延年

海青年は、自分が十五名の新人教員のリーダーである以上、自分が逃げてはならないと決断。喜んで安陽市立小学校への赴任を拝命した。この立派な行動が自分の人生を大きく変える契機となることを、張海氏自身もそのときは想像していなかった。

張海青年は、社会人としての人生のスタートに「損」を選んだ。しかし安陽市立小学校で無我夢中で頑張った張海青年は、僅か一年で共産党安陽市委員会宣伝部に抜擢された。というのは市文化行政を強化するため、若手教員の中から一名の幹部候補を教育委員会に求めたところ、張海青年が推薦されたのだ。

宣伝部は市の文化・行政の指導・補佐を目的とし、共産党委員会の中でも最も要になる部門だが、研修を兼ねて僅か一年余りのうちに、空前なる文化大革命に遭遇した。その非常なる時期には官民問わず、官僚や知識人の家系が問われ、親や親戚が地主であったり国民党時代に官職についていたりした者は、みな「歴史問題」として追及された。時の安陽市群衆芸術館館長らが皆、大革命の「対象」になったので、急遽、若き張海青年が派遣されたのである。

書画が大好きな張海青年は、「魚が大水を得た」ように、芸術宮が開催する書法篆刻、美術などの各講座に触れ、また、「毛沢東革命思想」を宣伝する各種書法篆刻展や美術展を手掛けることになった。書法や美術に直接に関わる仕事についたことに喜びを感じたのは、特に張海青年が得意としていた六朝書や隷書で揮毫した各種の展覧会や市民大会の横断幕が褒められた時だ。

一九七五年、三十四歳の張海氏に正式に常務副館長の辞令が出て、書法の振興に全力を投じることになった。

張海氏が講座や展覧会を多く開催した結果、市内の書法家のレベルは顕著に上がった。励みや交流のため、張海氏が皆の作品を一冊の作品集にしようと思ったところ、時の大家であった趙朴初氏（全国仏教協会会長、中国書協副会長）が安陽市に文化現状の視察に来ることになった。副館長の張海氏が案内役を務めた。昼休みの時に、作品集のゲラを趙朴初氏に見せたところ、市内の書法家のレベルが高いことを評価し、表紙の題字の揮毫を快諾した。この安陽市書法家の《書法作品集》は一九七六年に出版され、名実共に「一鳴驚人」（一たび鳴けば世間の人々を驚かせる）だった。文化大革命が終了すると、全国で最初の書法作品集として、安陽市は一夜にして全国で注目されることになった。さらに翌年には、全国的に著名な書法家の作品を招待し、国レベルの書法作品集の制作を立案した。そのときの表紙は、書壇で皆が尊敬する費新我氏（一九〇三―一九九二）に書いていただいた。同氏は江蘇省画院の専業書法家であり左筆書家でもある。毛沢東主席（一八九三―一九七六）が晩年、郭沫若に書壇で優れた大家の名を尋ねたところ、郭沫若は南京の林散之（一八九八―一九八九）と蘇州の費新我の名前を挙げたそうだ。

一九七八年の春先、張海氏は費新我氏を安陽へ招待し、文化宮で「書法創作」をテーマに講演していただいた。二週間の滞在期間中、張海氏は費新我氏と日夜を共にし、三十七歳の張海氏が問いかける書法に関するあらゆる質問に費新我氏は的確に回答した。満足の出来る回答が返ってくることや自分の作品に的確なアドバイスをくれたことに敬服し、以来、張海氏は費新我氏を師匠として敬仰し、作品の添削や疑問の回答を求めるため、文通をし続けた。二〇〇通以上に達した費新我先生との書簡のやりとりは、数十年後のいまも大事に保管されている。中でも創作に対して厳粛に取り組む姿勢は、張海氏が費新我氏より最も継承しているポイントである。

中国当代8.indd 117　2019/04/14 18:54

恩師・費新我先生夫婦と記念写真（1980年代、蘇州藝石齋にて）

一九八一年には、天津大学大学院教授の王学仲氏（一九二五―二〇一三）を招聘し、省内五都市（鄭州、洛陽、開封、新郷、安陽）で一カ月をかけて書法の基礎に関するシリーズ講座を開催した。そして翌年には、若手の書家を対象とした書法理論のゼミを二週間にわたって開催した。

一九八二年には、印壇の大御所・蘇州東呉印社名誉社長である沙曼翁氏（一九一六―二〇一一）を招聘し、中国書法家協会会員を対象に篆刻の人材を育成するための特訓ゼミを開催した。まるまる一カ月をかけて篆刻史や書法史を勉強し、漢印や明清の浙皖両派の大家の名作の摸刻や臨刻などをびっしりとしたスケジュールで行い、多数の人材を送り出した。例えば、今の西泠印社の副社長を務めている李剛田氏（一九四六―）も受講生の一人だった。

中国随一の新興省へ

河南省は、陝西省と並んで歴史文化が最も悠久であり豊かであった。しかし、戦前・戦後の様々なことが原因となり、江蘇省や山東省などに比べて書法の力が衰えてしまったので、再び書法の故郷として復活させることが張海氏の野望であった。

一九八〇年、河南省第二回文化界代表大会で河南省書法家協会が正式に設立した。中国書協よりも一年早かった。河南省共産党委員会宣伝部が全省より適任の幹部職員一名を選定した末、張海氏が選ばれた。省内には、鄭州や洛陽など、安陽より規模の大きい都市があるにもかかわらずである。やはり、張海氏の書法振興に対する情熱や、安陽で起した書法旋風とその実績には誰も敵わなかったのだ。

最初は省書協に張海が一人でスタートし、省レベルの書法振興策を立案した張海氏に対して、党の宣伝部、特に同部文化芸術処の董応周処長が高く評価し、全面的バックアップしてくれた。まず、張海氏の人事案を受け入れ、翌年に省内より六名中青年優秀な書法家が抜擢され、河南省の書協専属職員は七名になり、全国で一番の規模となった。そして、全国を驚かせる企画を全面的に支持した。

一九八四年二月一六日に、「第一回中原書法大賽（コンクール）」が河南省都・鄭州で行なわれた。このプロジェクトは全国を震撼させた。

会場は河南省の人民大会堂だ。省内十七市で予選を行い、各市の競書参加者の代表団、計一〇〇〇名の方々集まった。プロジェクトの日程は三日間で、その後方支援として、省下のバス会社、ホテル旅館、食堂、および駐屯する人民解放軍まで動員され、まさに省を挙げた破天荒ともいうべき書法振興の行事だ。初日は競い合い、二日目は審査、一〇〇〇人の競書参加者は博物館などを見学、三日目は結果発表と表彰式。

競書大会の前日、省教育委員会の協力により、人民大会堂には調達された一〇〇枚の卓球台が一面に設置された。当日、一〇人で一つのグループとなり、番号が付いた卓球台を囲み、不正を除外する役は人民解放軍の兵士だ。

一〇〇〇人の競書参加者に一〇〇名の戦士、そして二〇〇〇の観覧席も満員で、人民大会堂の内外は、空前ともいうべき壮観な盛会となった。年齢制限もない本当の能書の実力を公正不偏に検証するために、張海氏の企画案が実施され、それぞれの参加者には三つの競い合う項目を与えた。まずは作品の提出、次は自分が好きな内容と得意な書体を席上揮毫すること（書体・内容は自由）、最後は抽選で命題を示され、制限時間内に作品を仕上げることだ。

二日目には省内外の書法大家が構成する審査会を行い、全参加者の三つの課題に対する総合判断がなされ、一等賞一〇人、二等賞三〇人、三等賞一〇〇人の受賞者が選ばれた。そして受賞数の多い市に賞が与えられた。

この「中原書法大賽」は全国に注目され、北京を始めとする各省市の書協が見学団を河南に送り込んだ。時の新任中国書法家協会会長の啓功氏は、漢詩を詠んで絶賛した。「千人大賽古無儔　逐鹿書林筆墨適　万木草堂詩句在　八方風雨会中州」（千人の大賽 古き儔（ともがら） 無し、書林に鹿を逐（お）う 筆墨 適なり、万木草堂 詩句在り、八方の風雨 中州に会う）。

受賞経験者からは数多くの書法家だけではなく、文化行政に関わる者も生まれた。ちなみに北宋の都だった開封市の文化・スポーツ・メディアを仕切る行政トップの副市長・陳国楨氏は、一等賞の受賞者。出品当時は、相国寺文物管理課の職員だった。

中国当代8.indd 118　2019/04/14 18:54

一九八八年に第二回、一九九二年に第三回と、約四年に一度の大型プロジェクトを継続するとともに、新鋭書家を育成するため、大会から十五名の青年書家を抜粋し、「墨海弄潮展」という新人展を運営した。一九八六年の第一回墨海弄潮展は、なんと北京の中国美術館で開催され、河南省の十五名の新鋭書家が堂々デビューした。地方の新鋭書家たちの力作は高く好評され、一夜のうちに全国に認知された。

「中原書法大賽」と「墨海弄潮展」の両輪により、中原の河南より優れた書法人材が数多く輩出することになった。

一九八五年、「河南国際書法展」を開催。二十ほどの国や地域の書法家団体が出品し、開幕の当日には河南省博物館のドアが壊れてしまうほど、観客が詰めかけた。

張海氏の企画力、実行力、そしてリーダーシップは評価され、一九九一年には河南省書法家協会主席になり、一九九八年に省文連副主席、二〇〇〇年に省文連主席、中国書協副主席へと、文化官僚の道を進んだ。

《三言句》

仁者寿

102×52　2005年

張海氏が省書法家協会の主席として十七年間も陣頭指揮を執り、確実かつ効果的な書法振興策を実施した結果、河南省は一九八九年に北京で開催された第四回全国書法篆刻展にて、最高の入選数および入賞数を獲得。その後も毎回、江蘇省、浙江省、山東省と、一位、二位を争うに至るまで、名実ともに書法が盛んな省となった。

河南省の文化スポーツを担当する党委員会副委員長の張樹徳氏は、「河南省は、一人の人物・張海氏を正しく抜擢したことによって、書法の規模やレベルを全国で最上位にまで成長させた」と感嘆した。また、河南省のトップで共産党省委書記長兼省長の李長春氏（後に党中央政治局常務委員の七人のメンバーになった）も、張海氏の能力と人望を大いに評価した。

全国の書法復興で奔走

二〇〇五年、河南省の張海氏が中国書法家協会第五回代表大会で主席に就任し、初の専業主席が誕生した。それまでの歴代主席は、初代は将軍書家の舒同氏、そして二代目は北京師範大学の啓功氏、三代目は人民美術出版社社長の邵宇氏、そして四代目は同じく人民美術出版社編集長の沈鵬氏で、皆、北京在住の大御所だった。

地方で成功した書法振興策の経験を活かしながら、張海主席は中国書協のスタッフを率いて、全国の書法振興策の方案を練り上げ、普及の強化と優れた作品の創出の二輪に絞り込んだ。方針を周知するため、機関紙をはじめとするさまざまなメディアに文章を発表した。

まず手掛けたのは、書法の普及活動だ。

全国規模の書法の普及策として、各省市の書協に対して「中国書法が万家に進む」という方針を通達した。この「万家」とは、広い意味での農村、工場、鉱山、兵隊、辺境などを指す。すなわち、書協の書家たちは、それぞれの地域で書法普及講座や揮毫交流会、ならびに展覧会を行うことによって、書法の一般知識を普及や愛好家の育成に努めるのだ。特に著名な書家の作品を無償で配布することは、多くの者にとって無上の喜びとなった。毎春に行われるこのような書法普及活動は、新主席・蘇士澍氏の今の代でも続いている。

特にチベットなどの少数民族地域に定期的に書家の団体を送りこみ、人材の育成や漢字の普及活動を行い、民族融和に貢献したこと、そして二〇〇八年五月十二日に四川省汶川県で起こった震度八・〇の大地震や、二〇一〇年四月十四日に青海省玉樹チベット自治区で起こった震度七・一の大地震の直後に、張海主席が率先にして作品の寄贈や現金の寄付を行ったことについては、中国書協だけでなく、主席の張海氏自身も、共産党中央宣伝部・劉雲山氏（政治局常務委員）から表彰された。

数年も経たないうちに、書法普及の兆しは顕著になり、各地方で書法愛好家が生まれ、書法展覧会の出品

中国当代8.indd　119　2019/04/14　18:54

《四言聯》

136×32×2　2016年

獨持偏見　一意孤行

人数は空前の規模になった。そして張海主席は、協会員に古典を学び、時代に相応しい名作を書くように指示し、そのための具体策に取り組んだ。

二本の矢の一本目は、優秀作品と人物を表彰する制度の強化だ。王羲之ゆかりの書法の聖地・蘭亭の名をとった「蘭亭賞」は、中国共産党宣伝部が承認。中国文化芸術界連合会と中国書法家協会で共同主催の中国書法芸術の最高賞として、二〇〇一年に審査と表彰式が行われた。国が関わる「映画金鶏賞」や「テレビ金鷹賞」等の国家文学芸術賞に仲間入りした「書法蘭亭賞」の第一回が二〇〇一年に行われる際、張海氏は河南省にいた。時の河南省文連主席兼書協主席の張海氏は迷わずに河南省都・鄭州市に誘致した。

二〇〇五年に張海氏が主席に就任すると、すぐに復活に取り組み、翌年の二〇〇六年に五年振りに再開させた。そして、三年に一度の開催期間の定期化や誘致する開催希望自治体の調整などに腕をふるい、業務の正常化を図った。第二回は安徽省合肥で、二〇〇九年の第三回は再び河南省の平頂山市で、その後、張海主席は行政の財布の中身が豊かである書法聖地・蘭亭を有する浙江省紹興市への誘致を前向きに検討し、合意にまで漕ぎ着け、「書法蘭亭賞」の受賞式の会場は、紹興市に落ち着いた。その後、二〇一二年に第四回目、二〇一五年に第五回目、そして昨年、第六回目の「蘭亭賞」受賞式典は書聖右軍の祠で盛大に行われた。一九八七年に読売新聞社と人民日報社が共同開催した曲水の宴と同じ会場である。

回顧すれば、二〇〇一年の第一回のとき、張海氏は河南省の誘致側の責任者であり、二〇〇六年以降の四回とも、文連の主席と共に二人三脚で受賞者に賞杯を授ける中国書協のトップだった。その張海氏が主席の座を退いたのが二〇一五年の末。そして、おそらく本人も想像もしていなかったはずだが、二〇一六年の六回目の表彰式典に受賞者として高台に立たされ、「終身成就書法家」の最高賞を受賞した。歴代同賞の受賞者、啓功、王学仲、沈鵬などの諸大家と並んだのである。

「中国書法蘭亭賞」は、受賞式典と受賞作品の展示を同時に開催している。「終身成就書法家」は、書壇で大いに貢献した長老に与えられる、いわば書壇功労賞ともいうべき最高賞である。その他に「書法芸術賞」「書法佳作賞」「書法理論賞」「書法教育賞」「書法編集出版賞」といった部門を設けている。全国の中堅・新鋭書家の創作意欲や書史書論の探究心を奨励する役割が大きいのである。中国国内の書家たちを鼓舞するこの盛会を軌道に乗せた立役者、張海主席の貢献は、いうまでもなく顕著である。

二本目の矢は「三名工程」という。

毎回、全国書法展への出品数は六万を超え、書法はこれまでにないほど盛んな状況にまで発展してきたが、主席の張海氏が首を縦に振ることができるような納得のいく傑作は、なかなか見いだせなかった。そこで張海主席は悩んだ末、宏大な構想を練り上げた。ちなみに「三名工程」とは、名家（著名な書家）が古典名篇によって名作を作ることだ。準備・創作および審査期間を詳細を設けて、歴史に残る当代の名作をぜひとも生み出したいという国家プロジェクトである。中国文連が後押しした。張海主席は必要な実行予算を獲得し、「三名工程」のプロジェクトチームを結成した。メンバーは書の造詣が深い者ばかり。チームはまず、百篇の古典名篇を選び、次は中国書協の各専門委員会ならびに地方の書協が「名家」の条件に見合った候補を推薦し、チームの審査担当たちが無記名投票で一〇〇人を厳選した。選ばれた「名家」に百篇の名篇（名詩、名句、名賦など）の中から一つを選んで貰い、創作のポイントを打ち合

中国当代8.indd　120　　2019/04/14　18:54

わせ、創作用の経費や交通費など支給した上、一年間の創作期間を与え、各地に帰した。一年後に再びに北京で集合し、百人の名家より百枚の作品を徴収し、審査会の初審・復審、そして終審の三回審査を通過したものは「名作」と見なされる。プロジェクトが起動してから二年間半もかかった「三名工程」の第一回の書法展は、百人のうちの五十の作品が「名作」として認められ、二〇一三年十月九日に中国書法家協会が主催、中国文学芸術基金が協賛で、中国美術館にて公開展示された。開幕式典には多数の党や政府の要人も参列し、全国政治協商会議副主席（副議長）の韓啓徳氏が五〇名の入選者に名誉なる入選証書を交付し、張海主席もスピーチで総合評価した。中国美術館の展示会場には、名作を拝観したい関係者が全国から殺到し、身動きができないほどになった。書法美術の評論家や大学教授、ならびに書協理論担当する理事たちを中心にシンポジウムも開催。歴史に残る「名作」の評価は高かった。

2015年12月に中国書法家協会第7回代表会で任期満了した張海氏（右側）が党中央政治局委員宣伝部長・劉希葆、文聯主席・孫家正らとともに出席者と会見

また、自然の地形は東低西高であるのに対して、書法の普及および作品レベルは逆であり、全国展への出品数が極少の状況に対する是正措置として、張海主席自らが「西部書法の振興策」を練り上げた。中国書協が主催する「西部書法高級研修ゼミ」の参加者を募集し、四川省、甘粛省、チベットや新疆自治区など、十二の西部省自治区の地方書協が推薦した英才が集まり、北京より西部に近い河南省偃師市にある「張海書法芸術館」で、丸一カ月の泊り込みの研修を行った。この大型プロジェクトは、六年間も続いた。二〇一二年四月より二〇一七年十一月まで、計十五期の一〇〇〇名（壮族、回族、蒙古族、苗族、チベット族、土家族等、十八にものぼる少数民族の一〇三名の人たちが含まれている）。西部の英才たちが特訓を受け、皆、一回り大きくなって地元に戻った。ちなみに、一九四九年に新中国が成立して以来、期間が最も長い、規模が最も大きい、恩恵を受けた書家人数が最も多いと言われたこの大型プロジェクトは、全額の事業費を張海主席の寄付で賄ったのだ。最近、さまざまな全国書法展や、《中国書法》（雑誌）、《中国書法報》（新聞）などで、彼らの英才が頭角を現すようになった。

二〇〇七年、張海主席は書法振興の促進策として、全国の古い書法の歴史を持つ市町村に対し、中国書協が中国文連の指導のもとで「書法の名城」「書法の故郷」「書法の名山」などの名称を授与するように企画。王羲之や顔真卿の古里・臨沂市や甲骨文を発掘した安陽市、蘭亭を有する紹興市などは、「書法の名城」の名称が与えられた。

また張海氏は、全人大代表や全国政治協商会議常務委員として、書法及び文化芸術の振興や発展のため、二〇一一年に教育省が正式に「全国小中学校における毛筆書写授業の設置」を通達するまで尽力し、さらに「国家書法館」の建設ため、文教委員を率いて提案し、国に採用された。

中国文連・孫家正主席は、張海主席の作品集に寄せた序文に「歴代傑出する書家をみれば、大抵は同時に思想家である」と書き、張海主席が思想をもって書協を牽引した成果を讃えた。

引退後も夢を追う

二〇一五年十二月に中国書協第七回全国代表大会で名誉主席になり、第一線を退いた張海先生は、新しい夢を追い駆けた。それは自らが書法教育の教鞭を執ることだ。何にしても、やはり張海氏はスケールが違う。

まず第一に、張海氏は故郷に書法学院（学部）を創設。全国の美大や師範大学を除く国立総合大学として、初の書法学院（学部）を創設した。二〇一六年九月、人口数は間もなく一億に達する河南省省都にある最高の学府、鄭州大学に新たに四年制の書法専攻の書法学院（学部）を創設し、日本留学の経験を持つ人材を含む二十数名の一流の教授陣を全国公募で採用した。大学生は毎年に六〇名を募集し、博士課程のエリートは張海院長が自ら指導する。国より全面的なバックアップを取り付け、同学院名の題字は、中国共産党中央政治局常務委員・全国人民代表大会常務委員会委員長の呉邦国氏に書いて貰った。

そして第二に、自らの資金で奨学金制度を創設。

大学生や院生の励みのために、鄭州大学書法学院の中に「新我賞」を創設した。張海氏は自身の資金により、恩人であり師匠の費新我氏の名前から「新我」をとって「新我賞」を設けたのである。費新我氏の功績を顕彰すると同時に、学生の諸君に「歳月如流　不新我」（歳月は素早く流れ行き、我を絶えずに新しくするべし）という趣旨を教え込んだ。

中国当代8.indd 121　2019/04/14 18:54

「新我賞」受賞者との記念写真。前列中央に張海氏

毎年の年末に「新我賞」の審査委員会は、学生や先生たちを対象にし、全国レベルの展覧会での入選・入賞の状況、ならびに学術専門誌への論文の発表や受賞の状況を調査し、検証した上で「新我賞」の各賞受賞者を定め、翌年の三月に発表。表彰式では副賞として、一等賞の受賞者には一万元（十六万円程度）、二等賞の受賞者には三〇〇〇元（四・八万円）の現金を交付した。鄭州大学の五十六の学院（学部）中で、初めて奨励金を支給した。全国で見ても極めてまれである。

ちなみに、費新我氏に対する恩返しとしては、二〇一三年十二月二十一日、費新我氏の故郷・湖州市双林鎮（町）に開館した「費新我記念館」の建設の際に大金を寄付し、また個人蔵の費新我作品一〇点を寄贈したということも記しておきたい。

第三に、大学生のコンクールを三十七年振りに復活。

張海氏は書法学院院長として大学生同士の横の交流は最も重要と認識し、教育省や中国書協に呼び掛けた結果、三十七年振りに大学生の書法篆刻コンクールが復活した。第一回全国大学生書法篆刻コンクールは、一九八一年に行われた。趙樸初氏が展覧会の題名を揮毫し、啓功、商承祚、費新我など、大家が賛助出品するほど国中から応援された。今、第一線で活躍している曹宝林、王冬齢、陳振濂、鮑賢倫などは皆、受賞者であった。

二〇一八年、第二回全国大学生書法篆刻コンクールを鄭州で審査、北京国家典籍博物館で開催した。全国の六四〇校あまりの大学から、専攻・非専攻は問わずに五〇五四人の現役学生が応募した。同大学と中国書協で最強の審査委員会を組織し、厳格な審査の結果、約四パーセント、一九七点の作品が入選した。一五名の担当審査員による特別出品と合わせて、二一二の作品が六月二十八日から七月十二日まで、十五日間、北京国家典籍博物館で大勢の観客を集めた。鄭州大学張海書法学院と中国書協の共同開催は、今後も定期化にしていくと合意されている。

第四に、六朝書の聖地・洛陽で「臨書展」を協賛。

今年、五回目になる「魏碑（六朝書）聖地・全国魏碑・隷書臨書創作書法大賽（コンクール）」は、河南省文連、省書協、洛陽市人民政府、偃師市人民政府、中国当代書法篆刻院、鄭州大学書法学院、張海書法芸術（美術）館、世界文化遺産・龍門石窟管理委員会の共同開催で運営されている。

《龍門二十品》で有名な龍門石窟は、六朝書の聖地とされている。洛陽市は毎春、牡丹フェスティバルとともに、全国規模で高校生を中心にした「洛陽市全国青少年臨書コンクール」も同時に行っている。臨書展は、六朝書や漢隷であれば何でも出品可。

高校の受賞者に対して、まずは賞金一万元、そして大学入試で鄭州大学に限らず、国内どの大学の書道専攻であっても入学通知を持参すれば、その大学の四年間の学費の全額を「張海書法発展基金会」が保障する。大学生の受賞者に対して、大学院に合格すれば、御祝い金として三万元（四十五万円）を「張海書法発展基金会」が支給。

張海氏の寄付で生まれた「張海書法発展基金会」は、この数年の累計で、すでに三〇名を超えた高校生や大学生、院生に、約束通り賞金を支給している。この臨書展は、全国でますます人気が高まっている。張海氏は、今でも作品の収入があれば、絶えず「張海書法発展基金会」に資金を注入しているそうである。

第五に、「批評の愛――書壇青年俊彦（新鋭）書法家作品学術討論会」を開催。

「張海書法発展基金」は、新鋭書家の育成プロジェクトを全国で支援している。

今回の張海氏への取材の場所となった当代書法篆刻院（院長・李剛田氏）が《中国書法》と《中国書法報》などと連携し、二〇一七年より、すでに八回の討論会を開催している。

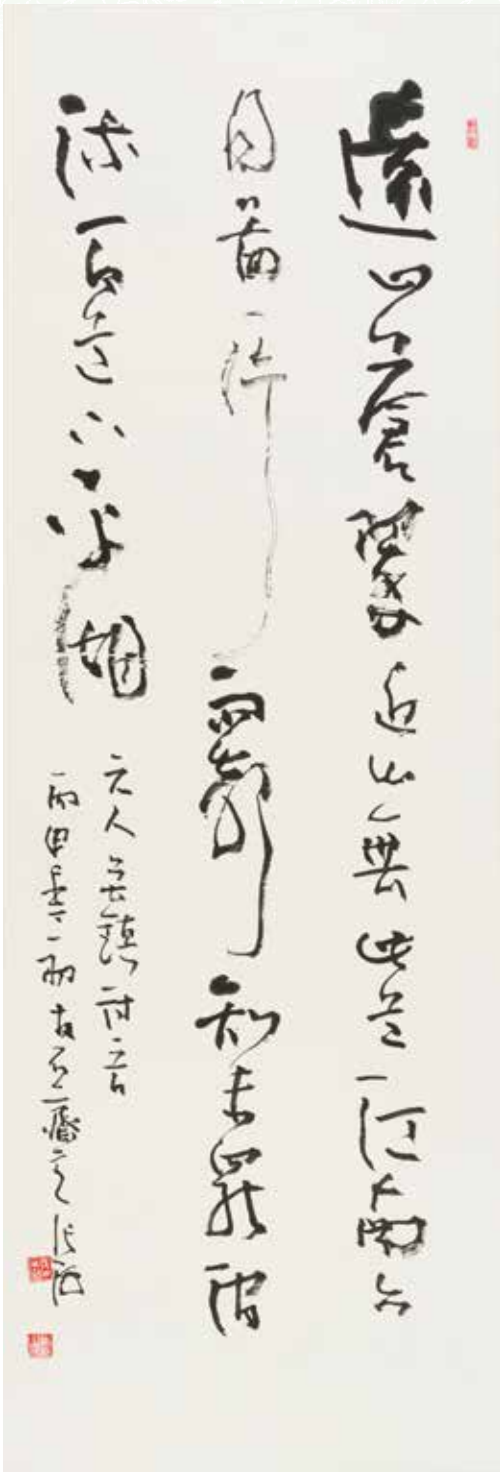
対象は四十五歳以下、全国書法展や全国草書展など、書体別の全国展での入選実績を持つ者である。書法作品は一〇枚の六尺全紙の作品で、篆刻作品は四屏（複数の印影を押したもので一屏とする）と一〇顆の原印。書壇の権威で構成される審査会が大勢の応募者から毎回五名の新鋭書家を厳選し、北京へ招待する。入選者の力作は、同院内にある展示ホールに展示。審査委員たちは、展示作品を見た後、討論会で一人一人に対して、率直かつ直接に批評やアドバイスを行う。新鋭書家の成長を促進するプロジェクトなのである。

今年一月十日に第七回「批評の愛――書壇青年俊彦（新鋭）書法家作品討論会」が北京の当代書法篆刻院で

中国当代8.indd 122 2019/04/14 18:54

開催された。書壇重鎮の劉洪彪（中国書協副主席、草書委員会委員長）、李剛田（同院院長、西泠印社副社長）、李世俊（中国書協理事、新聞出版委員会副委員長）、張建才（中国書協理事、河南省書協副主席）などの十数名の審査委員、そして中国民生省監督指導官の孫立仁が出席。今年も数百人の応募者より、江蘇省の朱河山、河南省の李彬、河北省の霍威、北京市の延志超、および浙江省の楊牧原の五名が実力によって初審、復審、終審の三段階を通過し、他の群英たちを押さえて堂々と選ばれた。今年の「批評の愛――書壇青年俊彦（新鋭）書法家作品学術討論会」は、李剛田院長が自ら進行役を務め、委員たちが遠慮せずに具体的に意見を述べた。終了後、江蘇省の朱河山は、「貴重なアドバイスを聞けてとても良かった。今後の進路に光を射してくれたように感じた」と語った。

今年の学術討論会は、中央美術学院（国立芸大）、首都師範大学、中国人民大学の院生たち六〇人ほどが傍聴した。



《呉鎮詩》

遠山蒼翠近山無　此是江南六月圖　一片雨聲知未罷　澗流百道下平湖（呉鎮）

200×67　2016年

催しの内容、および五名新鋭の作品は、共催する《中国書法》と《中国書法報》で全面に紹介され、当事者は直ぐに全国書壇で話題の中心人物になった。

第六に、先達達を顕彰。

張海氏は、書芸の研鑽や、市・省の文連の仕事を通して、大変な指導をしていただいた費新我、沙曼翁、王学仲の三大家の恩義を忘れていない。

そこで、故郷の偃師市に建設した「市立張海書法芸術館」に「三老（費新我、沙曼翁、王学仲三大家）特別展示室」を設置している。恩師たちを顕彰するために、張海氏の強い要望で実現されたものだ。展示されている「三老」の作品は、すべて張海氏の所蔵品だった。張海氏は「市立張海書法芸術館」にも寄贈した。

対日書法交流を重視

一九八五年、王鐸顕彰会（村上三島会長）の招聘により、河南省代表団の団員が初訪日（省の党副書記・韓勁草氏が顧問、画家の陳天然氏が団長、計六人の代表団）。三島氏の自宅訪問など、大阪・神戸・奈良・京都、そして東京と、二週間の日程で各地の書家たちと交流を行った。現在、日本書壇を牽引する杭迫柏樹氏が、当時、村上三島氏の高弟として訪日団の世話を懸命にされていたことなど、張海氏は今でも印象深く記憶している。

一九八六年、河南省は三重県と姉妹都市を締結するため、省政府代表団と省文化代表団の二つを同時に日本に派遣した。前者の団長は何竹康省長（知事）、後者は張海氏で、省内の新聞社、ラジオ・テレビ局、書法美術団体の代表らが参加し、姉妹都市および文化交流の調印式に立ち合った。

また、張海氏は、一九九八年、二〇一五年に中国書法家代表団を率いて訪日し、全日本書道連盟などと交流を行った。その二回目の訪日は、非常に充実した交流となった。

二〇一五年十一月四日午前、代表団が京都の小学校で「感謝」の二文字を練習して最中の授業を見学、午後に東京に移動し、五島美術館の名品を観覧、晩には毎日書道会が開催した歓迎会に出席。国際書法家連合総会で、両者が二〇一〇年より交流して来た経緯もあり、和やかな雰囲気の中で懇親を図った。

五日午前、辻元大雲事務局長の案内により書道用品店の玉川堂や栄豊齋を見学し、午後に全日本書道連盟を訪問、星弘道理事長などの役員らと会談した。その後に六本木の新国立美術館で開催中の「改組第二回 日展」を観覧し、「日中書道交流会」をテーマにしたシン

中国当代8.indd 123　2019/04/14 18:54

《十言聯》

247×42×2　2018年

且静坐撫良心所為何事　莫乱行従正道自遇好人

ポジウムに出席した。張海主席、朱培爾（《中国書法》編集長）、そして星弘道理事長、および今村桂山副理事長らがそれぞれのテーマでスピーチした。交流会の後半の揮毫会では張海主席が先頭に「山隨画活　雲為詩留」の聯句を書き、多数の日中書家たちが順番に交流の筆をふるった。そして晩には、全日本書道連盟が主催した交流レセプションに参加した。張海主席は、中国書協役員および幹部職員の潘文海、朱培爾、張建才、呉悠らを率い、第二回目の訪日において大変に満足の出来る交流を行った。

二〇〇七年に続いて二〇一〇年五月、温家宝総理が二度目の訪日を実現した。五月三十一日午後にホテルニューオータニの芙蓉の間で開催された日中文化人の座談会に、温総理が出席した。随行した張海主席や鉄凝氏（中国作家協主席、現・文連主席）らも出席し、張海氏は代表発言で、日中書道交流の必要性を強調した。日本側は日本芸術院会員で日中文化交流協会長の辻井喬氏、裏千家大宗匠の千玄室氏、書家の柳田泰山氏らが招待された。

書道は日中共有の文化であり、その日は張海主席が文化交流の主役を担った。座談会に併せた揮毫会も行い、張海主席と柳田泰山氏がそれぞれ、温総理の訪日感想で書いた「漢俳」や、辻井喬が応じて書いた俳句を揮毫し、日中文化人交流の催しを高潮に押し上げた。

書人としての探究精神

張海氏は一九九〇年代に、書法創作においては「一センチ突破理論」を提出。すなわち、名誉や讃美に取り巻かれている書法家も、自己満足せずに日々精進し、現状レベルより一センチでも上へ突破するような探究精神を持続しなければならない、と。

張海氏曰く、たとえば走り高跳びのアスリートが日々練習を重ね、さらに一センチ、さらに一センチと記録の更新を目指しているように、書法家も研鑽を重ね、さらなる一センチの新天地を目指すべきだ。そのために張海氏は、古典の真髄の再確認や再探究はもちろんのこと、書法以外の多様な芸術にも目を配り、ヒントを得るようにしているのだ。安陽・河南の書協の実務の歳月や、全国の書壇に君臨した十年間の多忙な歳月の中でも、自分に甘んじることなく、確実にできる「一センチ突破の理論」のレベルアップを日々念頭に、研鑽を重ねた。

数多く書家の中でも、王鐸に対する特別な憧れがあった。理由は、主に二つあった。第一に、王鐸の故郷の孟津県は、張海氏の故郷・偃師県（現在は市）と隣り合わせであり、ともに洛陽市下である。第二に、一九八二年に初めて王鐸の真跡を拝覧した際の衝撃、一九八五年に村上三島宅で王鐸の名品に触れた際に感じた強烈な震撼によるものだった。そして張海氏は、費新我、王学仲、沙曼翁の三名の大家との交流により、多いに受益した。

中国当代8.indd　124　2019/04/14　18:54

張海の書法人生は、三つの段階に分けられる。

一つ目は、青少年の洛陽の偃師・安陽時代である。伊河洛水の水を飲みながら、龍門石窟を仰いで成長し、小学校の教員や文化会館の責任者を務め、殷墟の甲骨に魅了されながら、書法の基礎に励んだ。

二つ目は、中壮年の省都鄭州時代だ。さまざまなプロジェクトで全国を驚かせた時代。張海氏は、鄭州で省書協の職員より始め、副秘書長、秘書長、副主席、主席、そして省文連の副主席、主席を歴任。視野を広げ、書法芸術を成熟させた黄金時代だ。

三つ目は、準老年の北京の時代だ。書協の主席に就任し、北京に移住。書壇に君臨した十年間で、もちろん上記のように後世に残す業績を数多く手掛けた。書壇を牽引しながらも、自己創作の進路をより高い次元で志向し、品格の高い書風で邁進し続けた。

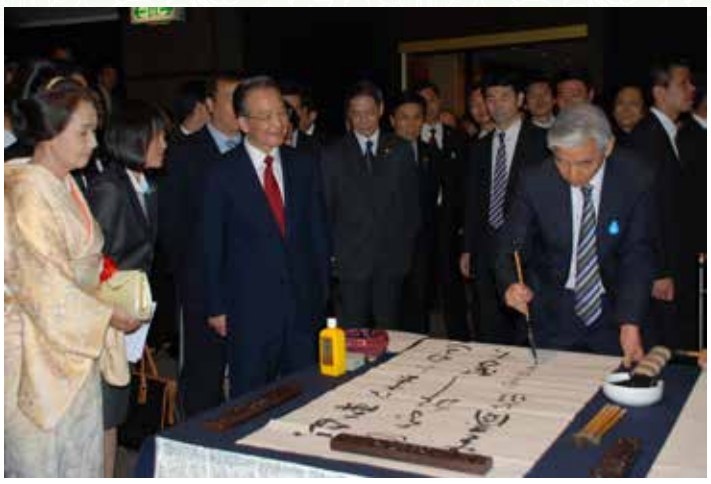
一九九二年の第五回全国展では、小幅な行草作が最も高い票数を獲得して最優秀賞を受賞。その後、杭州、南京、上海、済南、瀋陽、北京、そして故郷の河南省鄭州で個展を開催。二〇一〇年、中国美術館で「歳月如新——張海書法展」。日本を始めとした八カ国および地区の書道代表団も来場した。二〇一四年には河南省博物館で「古稀新声——張海書法展」。二〇一六年に国家博物館で行った「追夢の旅——張海書法展」には、彭麗媛・習近平夫人を始め、呉邦・国元全人代常務委員会委員長、賈慶林・元全国政治協商会議主席など、党中央、政府の要人や、書画界および文化界の代表者が大勢に来場した。

近年では、その「一センチ突破理論」によりさまざまな試行錯誤を重ねた結果、大きな成果をあげた。それは「前代未見」で独創的な「破鋒行草書」である。

九〇年代に偶然にできた美しい飛白に、張海氏は目を留めた。以降、繰り返し試行錯誤したところ、痩せた硬い古風な中鋒の線の所々で、鋒先が二つ、三つ以上に破れ、また再び合流するようになった。いわば張海氏が自由自在に制御した筆先が喜んで舞った、自然の飛白斑点の芸術だ。杜甫の詩句に正しく詠われたように、「書貴瘦硬始通神」（書は瘦硬を貴とすれば神に通じ始める）。その美学主張を取り込んだ新境地に辿り着いたのである。

張海氏は、多忙な人生の中でたくさんの著書や作品集を発表した。人民美術出版社、河南美術出版社を中心に、著書ならびに作品集は、下記の通りになる。《張海隷書二種》《張海書法》《張海新作選》《張海書法作品集》《張海書増広漢隷辨異歌》《張海書法精選》《創造力の実現——張海書法展作品集》《歳月如歌——張海書法展作品集》《佳作解析——張海行草書蘇轍・黄州快哉亭記》《佳作解析——張海隷書宋詞五首》《淡月疎星——張海細字行草書冊子選》《四体書創作自叙》《古稀新声——張海書法展作品集》《張海書法芸術》《張海四体千字文》《張海隷書首陽山賦》などである。

取材中、張海氏は、日本の書家との交流を図るため、遠くない将来、日本で個展もしくは日中二人展がしたいものだと呟いた。氏の人格や書の品格、そして無我の精神で行った偉業に感銘を受けた私もぜひ力になりたい。



2010年5月、訪日中の温家宝首相の前で揮毫する張海氏

2015年に中国書法家協会代表団を率いて訪日した際に、全日本書道連盟役員の案内のもとで張海氏（中央）が日展を観覧

郭同慶 かく・どうけい

書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院名誉院長、東京海派書画院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生顕彰会会長、豊道春海顕彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる

中国当代8.indd 125　2019/04/14 18:54